

## 『岩國大佐ハノイ日記』

高崎 禎夫 広幼 48

『岩國大佐ハノイ日記（1944年12月29日～1946年5月3日）』（岩國泰彦著、高崎禎夫・菊池陽子編）が、このほど、東京外国語大学教授・菊池陽子さんのご尽力で、東京外大海外事情研究所から、「電子書籍」として公開されました。公開先は、『岩國大佐ハノイ日記』[http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ita/e/pub/iwaku\\_ni\\_2pdf](http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ita/e/pub/iwaku_ni_2pdf) です。

岩國泰彦大佐は、名幼21期、陸士36期、陸大47期卒で、当時は、サイゴンの第2師団、ハノイの第21師団、プノンペンの第56師団からなる、作戦地域「仏印」の、第38軍の「高級参謀」でした。「高級参謀」の上には、少将の「参謀長」がおり、下には中佐・少佐の「作戦参謀」「情報参謀」「後方参謀」がいました。軍司令部は、昭和20年2月1日にサイゴンからハノイに移りました。

全246ページからなるこの『日記』の内容は、随所に見られる大佐の卓越したご見解のほか、第二次世

界大戦末期と戦後の、仏印における日本軍と現地状況、なかなんぞく、米機による司令部空襲（右脚負傷）、昭和20年3月9日～5月15日の「明号作戦」（連合国側政府の支配下に変わったフランス仏印軍を武装解除させる作戦）、日本軍のラオスへの道路建設視察、乗機被弾不時着（右顔面ほか損傷・人事不省―これが基礎で、大佐は復員後、昭和24年11月9日、46歳で逝去されました）とベトナム村民による大佐救出の様子、敗戦後進駐してきた中国・雲南軍将兵の振る舞い（賄賂要求等に対する大佐の率直な感想が述べられています）、復員の状況など、数少ない当時の仏印の生史料として、価値絶大です。

本書公開の最大の功績者は、菊池陽子教授です。菊池さんは、綿密な「脚注」、広範な「参考文献」、行き届いた「索引」を付して、本書を完成に導きました。ただ、当初の、原文の「解説・判読」者は、高崎です。大佐のお手書きの漢字のくずし字には、格別に苦慮しました。

なお、大佐のご長男、故辰彦くんは、広幼で、私と同期でした。遺稿集『鯉城残雪』が刊行されています。父子ともに、卓筆のKDでした。